

休日の午後、部屋の床に寝転んでスマートフォンを眺めていた。SNSをスクロールして、動画を少し見て、また閉じた。窓から入ってくる光がカーテンを白く光らせていた。

特に何もしたくなかった。でも何もしないままでいると、財布の中身を思い出してしまう。

今月は教科書代が重なった。サークルの費用も出た。アルバイトのシフトまで少なかったから、財布の中身はあっという間に底をついた。まだ次の給料日まで一週間以上あるのに。

(どうしよう……)

スマートフォンをいじりながら求人サイトを開いた。特に目的があったわけじゃない。ただなんとなく開いた。

画面をスクロールしていたら、ひとつのリンクが目にとまった。

『映像制作スタッフ 日払い 交通費支給 未経験歓迎』

金額のところを見た。一日で三万円と書いてある。

「三万……！ しかも映像系だ……！」

指が止まった。三万円あれば今月の心配はなくなる。

来月の教科書代にもなるし、サークルの飲み会も断らなくて済む。

それに、将来の仕事を明確に決めているわけではなかったけれど、映像は候補の一つだった。日給で三万円ももらえて、しかも映像系なら言うことなしだ。

急いでリンクを開いた。

内容はスタッフ業務、照明補助、小道具管理。見学スタッフ可。その文字列を読んで、これならいいかと思った。

材費、スタッフの人件費、全部合わせたら……まあ、学生さんには厳しい金額だと思うよ」

「そ、そんな……っ」

（損害補償……いくらになるの……？　払えない……絶対に払えない……っ）

足が震えた。ソファに座っているのに、立てなくなりそうだった。

「あと、これはうちの判断だけど、今後映像関係の仕事に就きたいなら、業界に顔が利く方が都合がいいよね。逆に問題起こした、って話が広まると……まあ、業界は狭いから」

田端さんは静かに言った。脅しているわけじゃない、みたいな顔で。ただ現実を伝えているだけ、みたいな声で。

（嫌だ……嫌だ、こんなの……。でも損害補償なんて払えないし、それに……っ）

「マナさん、真面目そうだもんね」

田端さんはふっと表情を緩めた。

「とはいえ、そもそも女優さんが来なかったのが原因だしね……。一個だけ条件つけてあげるよ。撮影を通して一度も絶頂しなければ、この映像はお蔵入りにする」

絶頂という言葉が空気に落ちた。私の顔が熱くなった。

「それ……本当ですか」

「嘘はつかないよ、俺」

目が笑っていなかった。でも口調は穏やかだった。

「一度でもイッたら映像は使う。一度もイかなければ全部消す。ギャラは全額払う。どう？」

（嫌だ……嫌だよ、絶対に嫌……。でも、損害補償なんて払えない……。っ）

胸の中でぐるぐると言い訳と恐怖が渦を巻いた。

本当にそんな契約が通るのか、私にはわからなかった。わからないからこそ、田端さんの言葉を否定することもできなかった。

（でも……イかなければいい。そうしたら、それだけ……）

自分の体のことは自分が一番わかっている。今日会ったばかりの知らない人に、そう簡単に乱されるはずがなかった。

（絶対に、イかない。それだけ守れば、映像は消してもらえる）

「わかり……ました」

声が掠れた。頷くのに、少し時間がかかった。

（嫌だ……本当に嫌なのに……どうしてこうなったんだろう……っ）

「うん、じゃあ始めようか」

ちょうど話がまとまったタイミングで、スタジオの奥から男の人が出てきた。

「っ………！」

思わず息を飲んだ。

それぐらい、綺麗な人だった。

背が高い。百八十センチは優に超えている。肩幅が広くてゆったりとした白いシャツを着ているのに体のラインが浮いて見えた。

そして、顔は彫刻みたいに綺麗な人だった。高い鼻筋と、ダークパープルの瞳をした切れ長の目。感情が読めない静かな目だった。

「凜、こっちが今日の相手役のマナさん」

田端さんがそう言って、私を紹介した。

「マナさん、ですか」

凜さんが私を見た。

測るような目で私を見ながら、短くそう言って手を差し出してきた。

握手を求められるとは思っていなかったから少し遅れて手を出した。凛さんの手は大きく、ひんやりとしていた。それだけで落ち着かない気持ちになった。

「よ、よろしくお願いします」

「こちらこそ。でも初めて聞く名前ですね。もしかして初めてですか？」

「そ、そうです……」

不本意とはいえ、初めては初めてだ。

私がそう頷くと、彼は「そうですか」と少しだけ温かな声で言った。

「初めては緊張しますよね。ゆっくりやりましょう」

「じゃ、今日のストーリー話すよ」

その直後、ぢゅううっ♡ と強く乳首を吸い上げられた。

「ひゃああっ！♡♡」

（こんな、声出ちゃう……♡ でもまだ……まだイってない……っ♡）

乳首を吸いながら舌でカリカリと引っ搔く。もう片方の乳首は指の腹と爪先を交互に使って転がされる。

カリカリ♡♡ ちゅぱちゅぱ♡ ぢゅっ♡ こりこり♡ れろれろ♡
カリ♡♡

「ああっ♡ ぐっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ やあっ♡♡」

（胸だけなのになっ♡ どうしょ、気持ちいい♡ でも、でもイかない……っ！♡ 絶対に……♡）

『凜くん、そこでいったん焦らして。触るか触らないかのギリギリで責め

て』

耳の中の指示に、凜さんの手がふっと軽くなった。爪も舌も引いて、乳首のすぐ表面を、触れるか触れないかの距離でなぞるだけになった。

すりっ♡　すり♡　すりっ♡

息だけが乳首の先をかすめる。指先も、乳輪の縁をぐるりと遠回りするみたいになぞって、肝心のところには触れてくれない。

「んっ……♡　あ……っ♡　やっっ♡」

さっきまであんなに責められていた乳首が、急に何もされなくなつて、逆にじんじんと疼いた。

すりっ♡　すり♡　すりっ♡　すり♡　すりっ♡

「今、もっとしてほしそうな顔しましたね♡」

凜さんが生の声で囁いた。事実だけを、静かに。

「し……してない……っ♡」

「初めてなのに、体は正直だ♡ 乳首、こんなに硬くして♡」

『いい焦らしだねー。じゃあ、ご褒美あげて。強めにね』

耳の中の声が合図になって、凜さんの指が待ちわびた乳首をきゅうっと摘まみ上げた。

きゅむっ♡ くにゅ♡ きゅううっ♡

焦らされた分、触れられた瞬間の刺激が何倍にも跳ね上がった。

「ひああっ！♡♡ あっ♡♡ そこっ……っ♡♡」

（我慢してたのに、いきなり触られたら……っ♡ 頭の中が真っ白に……っ♡）

摘ままれた乳首を軽く引っ張られて、こりこり♡ とねじられて、根元から先端まで扱くみたいに転がされる。焦らしと強い刺激の落差に、下腹の奥がきゅうきゅうと勝手に締まった。

きゅむきゅむ♡♡ くにゅっ♡ こりこり♡ きゅうっ♡

摘まんで、転がして、離して、また摘まむ。緩急のリズムに翻弄されて、なにも考えられなくなっていく。

「あぁっ♡♡ んっ♡♡ やっ♡♡ んっ♡♡ んっ♡♡」

（胸を触られてるだけなのに、腰が浮いちゃう……っ♡ こんな知らない……っ♡）

凜さんが一度口を離した。

「声が、甘くなってる♡ 可愛い声♡」

そう言ってまた口を近づけた。今度は反対の乳首を唇でそっとくわえた。
ちろ♡ ちろちろ♡ ちろちろちろ♡

乳首の先端だけを舌先で丁寧に舐め回す。もう片方の乳首は指でこりこり♡ と転がしながら親指の爪でそっとカリカリ♡ する。

カリカリカリカリ♡ こりこりこりこり♡

「んっ！♡♡ ああっ♡ 乳首の先っばだけ……っ♡♡ びりびりして……っ♡」

(きちゃう……っ♡♡ おまんこ、じんじんしてる……♡♡ やだ、イかない……っ♡♡)

『もう片方も忘れずに。左右で違う刺激、交互にね』

耳の奥の指示どおり、片方の乳首は舌でちゅくちゅく♡ と吸われて、もう片方は指の腹でくにゅ♡ と押し潰される。左右バラバラの刺激が同時に来て、頭の処理が追いつかなくなる。

ちゅく♡
ちゅくちゅく♡
くにゅっ♡
ぢゅっ♡
こりこり♡
ちゅ

「んーっ♡♡ あっ♡ 両方ばらばらで……っ♡ あっ♡ あっ♡」

ぢゅっ♡ と最後に強く乳首を吸い上げられた。腰がびくつとした。全身に電気が走るみたいな感覚で背中がしなった。

『んー、意外と手強いね。でもおっぱいはもういいや。次進んで』

イかなかった。

(……よかった。まだ大丈夫……♡)

息を整えながら天井を見た。

『じゃあおまんこ行って。クリ、ばっちり映してね』

スカートに手がかかった。

「あっ！　だめっ！」

凜さんの指が静かに動いてスカートを引き下ろした。下着一枚になった。凜さんの手が太ももの内側に触れた。そのまま、するする♡と内側を

上に向かって滑る。

「あっ……♡」

太ももの内側を静かに撫でながら凜さんは私を見ていた。熱っぽい目で見つつも、その奥では私を観察しているように見えた。

「マナの足、柔らかいね♡ 好きだな♡」

内ももの付け根に指がかかった。付け根のすれすれのところを指の腹で撫でる。触れるかどうかのギリギリで止めてまた近づく。

「んっ……あ……っ♡」

「いっぱい気持ちよくなろうね♡」